

## 小さな小さな絵の具の世界

小六・古場 つむぎ

バッグから自分と黒色だけをご主人様が持ち上げた。これから地ごくの時間が始まる。ちなみにぼくの名前は白すけ。みんなにとつたらぼくは絵の具の白色だ。

なんで今が地ごくかって？ それは思いきりご主人様からふられるからだ。ぼくの体の中身はもうすぐなくなる。だからご主人様はそのたびに強くふってぼくの中身をむりやり出そうとする。その時、とってもはき気がして気持ち悪くなるんだ。だからぼくはその事を地ごくの時間ってよんでるんだ。

自分でいうのもなんだけどぼくには親友がいる。それは赤色の赤たろうだ。ご主人様は女の子。だからご主人様はぼくらを合体させ、ピンク色をつくる。ご主人様は何度もピンク色をつくるから、いつの間にか顔見しりになって親友とよべる存在になったってわけさ。ぼくだって苦手な絵の具もいるよ。黒色の黒ただ。とっても生意気で口が悪くて、すごく意地悪で気が強くて、どんな色でもダークな色に変えてしまう…黒たの苦手な理由はいくらでもいえる。黒たはぼくたちにとって、ボス的な存在だから黒たが言った事は従わなくちゃならない。だからぼくと、黒たを合体して灰色をつくる時はいやいやながら合体する。10秒に一度は文句をいつてくるから本当にいやなんだよね。どうだい？ 絵の具の世界も人間の世界みたいに複雑なんだ。

最近、ご主人様がきらいになってきたんだよな、だって絵の具のケースにぼくらを直す時、順番がばらばらで、さっき友達になった子ともすぐはなればなれになっちゃうし、ぼくらの気持ちだって分かってほしいんだよなー。まったくもう。

絵の具界の一日は長い時もあれば短い時もある。つまり決まってるんだよな。たいていぼくらのご主人様は、2〜3時間で片づけてくれる。でも別のご主人様の子は、10時間以上経っても片づけてくれない時もあるらしい。ぼくだったらそんなの絶対たえ切れないだろうな。

今までで一番うれしかったことは、ぼくを使ってかいた絵が賞をとったこと。ご主人様が表彰台に立った時は、ぼくも立とうと思っただよ。あの絵は実に芸術的だったからね。

ぼくがそんな事を考えていると同時に、ぼくの中身もなくなった。「ママー、白色なくなったから捨てていい？」ご主人様の声が聞こえた。

「いいよ。今度、新しい白色買ってあげる」え……？　ぼくまだやれるよ？　ふってもいいからまだ使ってよ。そんな事を大きな声で言ってもご主人様には聞こえない。

「この絵が完成したら捨てとこ」

もう捨てられる。もうみんなと会えない。ご主人様にも。なんだかうら切られた感じがして、すごく切ない。まだほんのちよつと残っている中身に、自分がぼろぼろと流したなみだが混ざり合っただけっぽくなっているのが分かる。でも、もう捨てられていい気がしてきた。だって、中身がなくなったっていう事はいっぱいぼくを使ってくれたっていうしょうこ。それになくなって使われなくて、ずっとケースに入れられたままっていうのもそれはそれでさみしいもん

---

ね。

11色のみんなに、さようならっていった10秒後に、ぼくを捨てにきたご主人様がきて、ぼくだけを持ち上げた。今すぐく、スローモーションに感じる。ぼくは目をつむり捨てられるのを待った。捨てられた――

新しい白色がやってきた。しろうという絵の具だ。実はこの白色、ぼくなんだ。あれから、夢の中で神様から次はなんになりたい？と聞かれてぼくは、

「ぼくは、また白色として、ご主人様の絵の具として働きたいです」  
って言ったらこうなったってわけだね、でもこのことは神様と、ぼくと、今読んでる君だけの秘密。まあこれからも白色としてがんばります！

---